
魔法戦記リリカルなのは Past

剣聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは Past

【Nコード】

N1458M

【作者名】

剣聖

【あらすじ】

とある世界の、とある主人公に降り注いだ事件。

それは必然で、その少女は奇跡の復活を遂げる。

何故なら、それがその世界のストーリーだから。

だが、別の世界、別の可能性は、彼女が『死ぬ』ものがある。

これは、そんな世界の一ページ。

彼女の傍に居た、少年の物語の一ページ。

(前書き)

あの事件のあり得たかも知れない終わり方、です。
全体的に暗いです。悲しいです。

では、『魔法戦記リリカルなのは Past』 始まります。

それを聞いた瞬間、彼の世界は白と黒のモノクロに染まった。

何時もの仕事を飛行魔法で全力で飛び出し、転移魔法を使用した。

飛んだ先では既に何人も友人達が居て、待っていた。

治療中表示された赤いランプが消えるのを、何かを祈るようにしながら。

「なのは！」

彼は叫び、魔法による除菌を過去最速のスピードで行って、彼女の横に立つ。

すぐさま全力で治癒魔法を展開。
だが、彼女を翡翠の魔法陣の光が包んでも、彼女の命は刻々と削られて行く。

「なんで……！とまれ、とまれ……！」

早く治れと、更に光が強くなる。

だが、彼女は、

「もう、いいよ……！」

「なのはちゃん！？諦めちゃだめよ……！」

その弱々しい声に、ユーノと一緒に治癒魔法をかけていた金髪の女性が叫ぶ。

弱々しい声に反応しているかのように、心電図の音が、どんどん遅くなってゆく。

少年は耐えきれずに、叫ぶ。

「なのは……！絶対、絶対に助けるから……！！！」

「うづん、もう、いいんだよ、ユーノ君……私……」

「

いやだ、いやだ！治れ治れ治れ治れ治れ治れ治れ治れ治れ治れ
！！！！

だが、少年の祈りは届かず、代わりに聞こえる、少女の弱々しい声。
そして、弱々しい、笑み。

いつもの彼が大好きな輝かしい笑顔の面影しか無い、笑み。

「私……………本当に、ユーノ君に会えて、よかった……………」

「なのは！」

そして、彼女の瞼は閉じ、顔から生気が消えた。
命の鼓動を示す機械音も、変わらなくなった。

つまり、彼女は、

「 」

本の海の中、彼は居た。

彼は探す。探し続ける。

何をか？決まっている。

彼女を取り戻すための方法だ。

「なのは……………」

「……………」

海鳴市。

そこにも、墓地はある。

その一角に立てられた真新しい墓石の前に、二人の少女が居た。
彼女達は、その墓の主の親友と言える存在。

いつもは強気に釣り上がっている緑色の瞳も、悲しみの色に染まっ
てしまっている。

もう一人の少女の瞳も、同様だった。

「なんで、死んじゃったの……………」

「……………」

金髪の少女の声に、名前を呼ばれた少女は絶対に答えない。

紫色の髪の少女はそれが分かっているからか、何も言わない、言え
ない。

答えなど返ってこないと分かっているのに、彼女は更に言葉を続ける。

「皆、皆悲しんでんのよ。アンタ、自分がどれだけ周りに好かれてたのか、分かってんの？」

あれから、あの悲劇から十五日間が経過した。

皆、まだ立ち直れてない。

それだけ、彼女の存在は大き過ぎた。

「フェイトも、はやても、．．．．．アイツも」

彼女の脳裏に最後に浮かぶのは、瞳から全ての光が失われた少年。その瞳を見た瞬間、彼女は怒りをぶつけることが出来なくなった。隣の彼女も、温和な彼女とは思えない程の憎しみを少年に抱いていたのに、少年の濁った、いや、変質してしまった瞳を見てそれはぶつけられなかった。

恐らく、少年の心は壊れていたんだろうから。

「な、んで．．．．．！死んだのよバカあ．．．．．！！」

「．．．．．ッ」

灰色の墓石の前で、二人は、アリサ・バニングスと月村すずかは、また泣いた。

その墓石には、「高町なのは」と掘られており、それが彼女の死は現実なんだと、強く、宣言していた。

喫茶「翠屋」と呼ばれる場所がある。
普段は開いているそこは、今は閉まっている。

肝心の経営者達が、経営など出来る状態では無いのだから。

道場がとある家庭にはある。

その日本古来の空気が漂うその空間は、空気を切り裂く音で支配されてきた。

木刀を振っているのは、黒髪の女性。

彼女、美由紀は、何かを断ち切るように一本の木刀を振るう。

その瞳には、涙が浮かんでいた。

その家にも、暗い雰囲気が漂っていた。

いつもは明るい母、桃子と父、士朗も、冷静な兄、恭也も、暗い。

家族が二度と自分達の手の届かない場所に行ってしまったのだ。当然のこと。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

結局、その日もその家庭に明るい声が響くことは無かった。

「主はやては．．．．．?」

「まだ部屋から出て来ない。シャマルも落ち込んだままだ」

「そうか．．．．．」

また別の家庭で。

一人の獣の耳を生やした男と、桃色の髪を一つに纏めた女性が部屋で話して居た。

二人の話は、やはり家族のこと。

「リインフォースが慰めようとしているが．．．．．難しいだろ
う」

「そうだな．．．．．ヴィータは、部屋に閉じ籠ったままか．．．
」

「ああ．．．．．」

彼等は守護騎士と呼ばれている存在。
人形などと呼ばれたりもするが、ちゃんと人格がある。
そして人格があるがゆえに、後悔し、悲しむ。

「グイータとシャマルは自分の力の無さを嘆いているのだろうか……」

「……所詮、我々も神では無い。人一人、満足に救うことも出来無いということ、か……」

いくら騎士として、人として大人な二人でも、落ち込む。

それだけ彼女は、周りから好かれていたのだ。

彼女シグナムと、彼ゼフィーラは不謹慎ながら思う。

なんで、なのはは死んでしまったのかと。

「フエイトオ」

「」

己の使い魔の言葉が耳に入っていないのか、彼女は無言でただ虚空を見続ける。

その赤い瞳には、光は宿っておらず、世界（現実）を見ていなかった。

「フエイト」

再度、赤髪の女性は呼びかける。

だが、主人たる彼女は時が止まってしまったかのように反応を返さない。

彼女を支えていた一番の人物は、もうこの世にはいない。

母を失い、初めての友人まで失ってしまった彼女は、現実から逃げてしまっていた。

勿論、彼女に呼びかける女性、アルフも悲しい。悲しいが、自分よりも主人のことだ。
だから、

「フェイト……………」

彼女に、呼びかけ続けた。

次元の狭間に位置する管理局本局。
そこを、一人の少年が歩いていた。
その姿は管理局の制服では無く、黒いバリアジャケット。

「あのフェレットもどきが……………!!」

彼も、悲しい。

だが仕事上、こういった経験は何度かあるし、父親も幼い頃に死んでいる。

だから、他の者達よりは自由に動けた。

だから、彼を止めるのは、

「.....」

自分なのだろう。

向かうは、無限の書庫。

そこに、壊れた彼は居るはずだ。

「.....」

彼は探す。
自分の身など気にせず。
搜索を始めてからどれだけ経ったのか分からない。
だが、けっして短い時間では無いだろう。

「……………で、なんで君がここに居るんだい？クロノ・ハラオ
ウン執務官」

「まだ人の気配に気づくだけの人格は存在したか、ユーノ・スクラ
イア司書」

お互いのフルネームと位を言い合い、二人は対峙する。
どうやらクロノは簡単な幻術魔法で隠れていたらしい。
ユーノも探索魔法の行使を止め、姿を表したクロノの姿をしっかりと見る。

その瞳は、狂気に染まっていた。

「……………お前、何をしてるんだ？なのはの墓にも行ってない
んだろっ？」

「……………」

クロノの問い掛けに、ユーノは答え無い。
その姿を見てハア、とため息を吐き、クロノは言った。

「なのはの死を認めるのが嫌か」

的中。

ユーノは瞳の狂気の色を強め、クロノを見る。

その、人間がしてはいけない瞳を見ても彼は全く動じず、ヤレヤレとばかりに手の平を上に向け、再度ため息を吐く。

「フン、やはりフェレットもどきはフェレットもどきか。この憶病者が」

「黙れ……………」

安い挑発。

だが狂気に染まっているユーノにはそれで充分だった。

無重力の空間を一気に飛行魔法で翔^{かけ}て、クロノの顔面に拳を放つ。

「ぐっ……………！」

それをクロノは何故か障壁を張らず、そのまま直撃された。

いくらユーノの身体能力が低いとはいえ、魔力で強化された拳はそれなりに効くはずだ。

だが、それでもクロノはそのまま受けた。踏ん張りが効かない無重力内だからクロノは吹っ飛び、本棚に叩きつけられる。

普段のクロノなら「執務官に暴力を振るうなど、覚悟は出来てるんだろうな？」などと言うが、彼は、

「これで正当防衛だな！」

「がっ!？」

ユーノに高速で近付いて、思いっきり殴り返した。

吹き飛び、本棚に直撃する前に飛行魔法で態勢を整え、クロノに向かって飛ぶ。

「ああああああっ!！」

「うおおおおおっ!！」

そこからは、ただ、殴り合い。

魔法の要素が殆ど感じられないただの殴り合い。

血が出て、所々に内出血が出来てゆく。

無限書庫内に、肉と肉がぶつかる、鈍い、生々しい打撃音が響き続

ける。

「お前、ここで調べていただろう！死者を取り戻す方法なんていう、あり得ない物を！」

「黙れ！あり得ないなんて無い！どこかに、どこかにある筈だ！なのは取り戻す方法が！」

クロノは拳を振る、ユーノも拳を振るう。

だが、振るう意味は全く違った。

一人は失った物を取り戻すという、幻想のため。
もう一人は、

「この、バカが！」

「ぐあっ！？」

その、バカな悪友を止めるためだ。

「いいか、よく聞け！」

拳を叩き込み、ユーノの服の襟首を左手で掴み、クロノは叫ぶ。

「どんな事をして、過去は取り戻せないんだよ！いい加減目を覚ませ、フェレットもどきー！」

もしかしたら、この書庫を揺らす程の大声はクロノの人生で一番叫んだ瞬間かも知れない。

そして、クロノはユーノの顔面を右手で思いっきり殴りつけ、下に叩き落とした。

「がはっ！」

床に叩きつけられ、無重力のせいでフワッと浮いた彼は、悪友のセリフが頭で繰り返されるのを感じながら、意識を黒に染めた。

少女の声が響く。

——ユーノ君

(ああ、きつとこれは夢なんだな)

ユーノはボヤーとした意識の中、そう思った。

何故なら、彼女は死んでいるのだから。

認めたく無いが、そうなのだから。

認めたく無いから、取り戻す方法を探していたのだから。

——ユーノ君。取り戻しなんてしなくてもね

(優しい、声だな)

彼女の、優しい声。

それはユーノの心にじゅくりと染み込み。

——私は、ユーノ君の傍に居るよ。

跳ねた。心が、心臓でも無いのにドクン!と跳ねた。

——泣かないで。

(僕、今泣いてる………?)

夢の中、泣いているという感覚がよく分からないが、ユーノは泣くのを止めようとする。

——ゴメンね、ユーノ君。私の自業自得なのよ。

(そんなこと無い！)

——ふふふつ、ユーノ君は優しいなあ……でもね、やっぱり私の性なんだよ。

(なのはは、いつもいつも自分の責任にしてばかりじゃないか！)

——ユーノ君もでしょ。もう。……私ね、魔法の力で、誰かを助けられるのが嬉しかったんだ。

——今まで、あんまり自分が出ることって無かったから。

——だから、キツカケをくれて、私の友達になってくれたユーノ君に出会えて、本当によかった。

(でも、僕に出会わなかったら君は！)

——何いってるの、ユーノ君。私ね、

——ユーノ君に出会わずに一生を終えた場合と、ユーノ君に出会えて早く死ぬのなら、出会えた方が幸せだよ。

その言葉を聞いて、ユーノは絶句。

と、同時に、心があたたかくなってくる。

——だから。前を向いて歩いて行って！ずっと、傍にいるから！

「なのは！」

ガバツ！とユーノは布団を撥ね上げ、飛び起きた。

「はあ、はあ………そうか、やっぱり、夢か………」

そう、夢。

夢なのだが、ユーノにはどうしても、あのなのはの言葉が自分の脳が作り出した偽物には思えない。

「……………前を向いて、歩く」

ユーノは、俯いた顔を上げる。

その翡翠の瞳に、狂気はすでに宿っておらず、代わりに光が灯り始めていた。

前へと進む、意思の光が。

「全く、クロノ君も無茶するね」

「フン。殴りたくなつたから殴つただけだ」

管理局の戦艦、アースラの艦内を歩きながら、会話する二人がいる。少年に話しかける茶髪の少女は、その少年の返事に苦笑する。

ユーノが無限書庫で巫山戯たないような資料を探していると聞いたのは、少女の方。

そしてそれを少年に伝えると、少年は直ちに無限書庫に向かった。

帰ってきたらボロボロだったが。

「で、ユーノ君は正気に戻れそう？」

「さあな。後はアイツ次第だ。まあ、戻っていなかったら再度殴り飛ばしてやるさ」

ガーゼが張られた頬に触れながら、少年は笑顔で言つてのける。

少女は思う。少年も立ち直つたのだなと。恐らく、少年も気にしていただけるうから。

「さっ、行くぞエイミィ。仕事はまだ沢山あるんだ」

「了解！」

だから、私もいい加減立ち直ろう。

彼女は、そう思って先を歩く彼について行った。

「・・・・・・・・あれは」

「あつ・・・・・・・・」

今日も墓参りに行った二人が見たのは、彼女達が向かおうとしていた墓の前に立つ、一人の少年。

壊れていた筈の少年の瞳には、光が灯っていることが遠くからでも認識出来た。

「アイツ・・・・・・・・なんで・・・・・・・・」

アリサは、思わず呟く。

あの少年はもう立ち直れないと思ったのに、なんで自分達より先に

立ち直っているのだろうか。

「.....」

それはすずかも同じで。

驚き過ぎて、声を発することが出来なかった。

「.....」

小さく、何かを言っている。

だが、少しばかり遠過ぎてその声は雑音にしか聞こえない。
そして言いたいことを言い終えたのか、暫くして彼は立ち上がり、
アリサとすずかがいる場所とは逆の方向に去って行った。

それを、ただ二人は見つめるだけだった。

「しゅめんなさい」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

高町家のリビングで、ユーノは四人に向かって頭を下げていた。

「……………開き直ったのか？」

「違います。開き直すことなんか、一生出来ません」

恭也の問いに答えるその顔は悲しみにも染まっているが、それを乗り越えようとする意思が見え隠れしている。

「ただ、前に進む事にしたんです。なのはも、そうお願いすると思いますから」

其処まで言って、彼は立ち上がる。

「また、謝罪をしに来ます。僕の罪は、一生消えないものだから」

失礼します、とユーノは部屋から出る。
そして扉を閉める音と、足音が遠ざかって行き、消えた。

「……………ユーノ君って、強いね」

ポツリ、と美由紀が漏らす。

正直、誰よりもショックを受けていたのはユーノだろう。
だが、あそこまで立ち直っている。

「ああ……………」

「ええ……………」

その言葉に、士朗と桃子は同意した。

「何の用だ、スクライア」

「お願いがあつて来ました」

八神家のリビングにて。

シグナムとザフィーラは少年と相對していた。
はやてとヴィータ、シャマルはいない。
恐らく、まだ部屋にいるのだろう。

「お願い………?」

「はい」

ザフィーラの言葉に頷き、ユーノは言った。

「僕に、訓練をつけてください!!」

勢いよく頭を下げながら、大声で彼は二人に言う。

そしてその大声は、二階に居た三人の耳にも届いた。

「………顔を上げる、スクライア」

シグナムがそう言うと、ユーノは顔を上げる。

その顔は、決意の表情に染まっている。
表情を見て、シグナムは一言。

「手加減はせんぞ」

「はい！」

再度、彼の大声が八神家に響いた。

「.....」

フェイトはアースラに居た。

その瞳はやはり何も写しておらず、今にも立ち止まって死んでしま
いそうだ。

壁に手を付きながら、彼女はゆっくりと歩く。

「ッ！？」

だが、その足はトレーニングルームから聞こえた破碎音で止まった。トレーニングルームの結界内に居たのは、一人の少年。

彼は緑色の魔法陣を展開してゆき、次々とオートスフィアから発射される魔力弾を弾いてゆく。

恐らく何時間もぶっ続けてやっているのだろう。

彼の顔に疲労の色が見える。

だが、その瞳は、意思の光に染まっていた。

「.....」

そんな彼を見て彼女は現実から逃げるのを、止めた。

それから彼は努力し続けた。

攻撃魔法が使えないから、魔力刃による接近戦、捕縛魔法を集中的

に鍛え、一年で前線で戦えるようになった。

オリジナルの魔法を生み出し、中距離戦闘も出来るようになった。

魔力量を頑張って増やしつつ、魔力運用の効率化を高めた。

そして彼は、公式総合ランクAAA+、結界魔導士ランクS+を取り、仲間内のS+を倒せるほど、強くなった。

武装隊に入隊し、彼はこう呼ばれるようになった。

「努力のエース・オブ・エース」と。

彼は前に進む。

何故なら、彼女に貰ったのだから。

どんな困難があっても、前に進み続ける心。

胸元で輝く、紅き宝玉の名前である、

不屈の心を。

彼は進み続ける。
その胸に、不屈の心を秘めて。

(後書き)

どうだったでしょうか？少しでも感動して貰えたら何よりです。
こんな結末のお話しは、きつとどこかの平行世界にあるでしょう。
それでも、彼等なら……

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1458m/>

魔法戦記リリカルなのは Past

2010年10月13日02時49分発行